

## 論文要旨

題目：接触場面の意見交換会話における日本語中級非母語話者の会話参加の様相

—インターアクション能力養成のための会話指導に向けて—

氏名：小松奈々

韓国語を母語とする日本語中級学習者の会話指導上の課題のひとつとして、抽象的な内容を含んだ意見交換会話を円滑に達成する能力の養成が挙げられる。本研究は、日本語母語話者（以下 NS）との意見交換会話における中級非母語話者（以下中級 NNS）の会話参加の様相を明らかにし、その特徴を基に会話指導案を提案することを目的とした。

これまで、非母語話者の「話すこと」に関わる能力としては口頭能力が重視され、インタビュー試験などにも応用されてきた。しかしながら、口頭能力は話し手としての能力に重点が置かれており、聞き手として、あるいは会話の一参加者としての能力を表すには限界があると言える。一方、言語によるコミュニケーションを社会文化活動の一部と捉え、ある社会的文脈に基づいてどのようにやりとりができるかを表す能力としてインターアクション能力（ネウストプニー, 1995）が挙げられる。本研究では、インターアクション能力を伸ばすことを目標とした会話指導のため、中級 NNS を話し手であり聞き手である会話の参加者と位置付けて分析を行った。

本論文は5つの研究で構成される。研究1から研究4では、インターアクション能力の高い話者として超上級非母語話者（以下超上級 NNS）を想定し、中級 NNS の接触場面と超上級 NNS の接触場面の会話データを比較し、中級 NNS の意見交換会話における課題を探った。研究5では中級学習者を対象とした実践研究を行った。

研究1および研究2では、意見交換会話の全体像を明らかにすることを目指した。研究1では、雑談会話と意見交換会話への会話参加の比較から、中級 NNS が意見交換会話の会話スタイルにどの程度対応できているかを分析した。その結果、意見交換会話では雑談会話より1ターンが長く、共有した情報を合成・加工する発話機能を多用する傾向が見られた。しかし、超上級 NNS に比べ、中級 NNS は意味交渉のための発話が多く、「意見」機能および「評価」機能を持つ発話は、超上級 NNS の平均値より低いことがわかった。

研究2では、研究1で明らかになった中級 NNS と超上級 NNS の類似点および相違点について、会話参加者の対称性という視点からさらに詳細な分析を行った。その結果、中級 NNS は NS の確認要求に対する応答が多く、NS の発話への同意の発話が少なかったために、会話参加が非対称になっていることがわかった。

研究1および研究2の結果から、中級 NNS は「意見」および「同意」の発話に困難を抱えていることが推測された。そこで研究3および研究4では、意見交換会話を局所的に捉え、意見陳述部とそ

の周辺に焦点を絞って分析を行った。

研究3では、会話参加者がテーマに関する考えを述べている部分を「意見陳述」と定義し、構造と内容構成の傾向を探った。その結果、中級NNSとNSのペアは簡潔な意見陳述が少なく、特に中級NNSは個人の経験談をはじめとした状況の説明が多く、意見陳述が冗長になる傾向が見られた。一方で、超上級NNSとNSのペアでは話者同士が簡潔に意見を述べ合う傾向があり、内容構成においては、意見に対する理由に裏づけをする、主張を明確化したり限定したりするなどの特徴が見られた。これらの違いは、会話状況を把握し、コンテキストに合わせた意見陳述を行うというインターアクション能力の差によるものであることが示唆された。

研究4では、本研究における「同意表現」を定義した上で、頻度と種類別の出現数を分析した。「会話相手と同意見の場合」と「会話相手と異なる意見の場合」の2つの条件ごとに分析を行った結果、会話相手と同意見の場合、両群の同意表現の出現頻度は同程度だったが、中級NNSが相づち的な発話による同意表現を多用しているのに対し、超上級NNSおよびNSは実質的な発話によるものと相づち的な発話によるものを使い分けていることがわかった。会話相手と異なる意見の場合、中級NNSでは同意表現をほとんど用いていない様子が観察されたのに対し、超上級NNSおよびNSでは全面的な同意ではないというシグナルを送りつつも同意表現を用いていることがわかった。

研究5では、研究1から研究4で得られた結果を基に意見交換会話の指導項目案を作成し、韓国語を母語とする中級学習者4名を対象に実践授業を行った。全8回にわたる授業でのNNS同士の意見交換の様子を会話データとして、意見の述べ方および受け止め方についてフィードバックを行ったところ、指導初期には話し手として意見を述べることに集中していた学習者が、クラスでのディスカッションを経て、相手の立場に立って意見を述べることの重要性に気づくという変化が見られた。

本研究の意義は、中級NNSに必要な会話技術がNNS自身にだけでなく、会話相手との関係性の中にもあることを明らかにした点にある。そしてまた、中井(2012)で提唱されている「会話データ分析」「会話指導学習項目化」「会話教育実践」から成る「研究と実践の連携」が、中級NNSの意見交換会話を対象としても実現しうることを実証した点でも意義のある研究と言える。